

PBeM『VOiCE』第1回リアクション

01-E 風になるまで待つ

●ぼくのともだち

ふたつの丘に、丘はない。

閉じた扉に、扉はない。

12枚の盾に、盾はない。

この世界は「ない」ものばかりなのに、「ある」ふりをしている。

ぼくの大切な友だち、ルン＝ペルはそれが気に入らないらしい。

(だってさ、考えてもみなよ。丘がないなら、どうして「ふたつの丘」なんて言うのさ?)

父さんも母さんも、学校の先生もみんなそんなの気にしてないよ。みんな、それが当たり前なんだ。

ぼくが小声でそう言うと、ルン＝ペルは言った。

(なんだい、キミまで、そんな大人みたいな言い方しちゃってさ。探しに行こうよ。ボクたちだけのふたつの丘を)

探す? どうやって?

(うーんと高いところから、街を見回してみるんだ。そうすれば手っ取り早いだろ?)

そんな高い建物あったかなあ。

(あるはずさ。思い出してごらんよ)

うーん、じゃあ、病院かなあ。

(そんなものより、もっと高いものがあるじゃないか! さあ、思い出して!)

うーん、分からないよ。降参だ、ルン＝ペルは知ってるんだろ?

(だらしがないなあ。風車さ! あの電気を作る、海辺にずらーっと並んでる風車のプロペラさ! あれは病院なんかより、ずっと高い!)

そっか! すっかり忘れてたよ。この街には風力発電所があったんだっけ。

(まったく、あちこちの街に行きすぎて、ひとつのところが覚えられなくなっちゃったかい? さあ行こう! 誰も知らない、ボクたちだけのふたつの丘を見つけて、秘密基地にしよう! クラスのみんなには内緒だよ)

そう言って、ぼくを誘うルン＝ペルは、白いマントをふわっと広げて、今にも飛び立つ鳥みたいに見えた。

ぼくは今でもそれを覚えている。

● Les Enfants Terribles

みんな、学校に行けていいな。

みんなと遊びたいな。

みんな、僕より背が低くてちっちゃいんだ。だから、かくれんぼするとなかなか見つけれられないんだ。みんな、隠れるのすごくうまいよね。

スプーンを片手に、穂刈幸子郎は食事の用意をする金髪の看護師に話しかけた。

「ねえ、看護師さん。僕、学校へ行きたいんだ。みんなと遊びたい」

「そうね、元気になったら通えるわよ」

「ほんとに? 看護師さん、いつもそう言うけどさ、僕はいつになったら元気になれるの? ねえねえ、ねえったら!」

口を尖らして拗ねる幸子郎に、看護師は苦笑しながら答える。幸子郎がそう言い出すのも無理はないか、と思いつつながら。

入院中の子どもたちに学習の遅れが出ないように、学校の授業データが個人タブレットに自動転送されてくる。今日はその中に「社会科見学について」というお知らせが入っていたのだ。ほぼ毎日学校へ行きたい、と言っている幸子郎だが、今日はやたらと食い下がってくるのも、それを見たからだろう。

「そればかりは、わたしからはなんとも言えないわ。幸子郎くんのごことは、わたしだけでなく、ドクター・シュトライヒリングとドクター・ベネットも、一緒になって考えることだもの」

「じゃあさ、どうしたらドクターたちは僕を元気だって信じしてくれるの? 毎日言ってるのに、全然聞いてくれないんだ。ひどいよ」

「どうしたら、と言われてもねえ……この間の検査だって、結果はまだ出ていないし。きちんとドクターたちの言うことを聞いて、お薬をちゃんと飲んで、まずはいい子にしてい

ることじゃないかしら」

てきばきと配膳しながら話す看護師の態度はいつだって同じで、幸子郎にはそれが気に入らない。

「いい子にしてろ、なんて。僕はご飯は残さずきちんと食べるし、風邪もひいてない。毎日お薬飲んでるし、ドクターの言うことだって聞いているもん！」

「そうね、じゃあそれ以外の方法で、元気だって分かっただけじゃなくちゃね。——はい、できました。いただきます、しましょうね」

その夜、幸子郎は考えた。眠さに負けつつも、それでも一所懸命に考えた。

好き嫌いを言わず、食事をする。薬を飲む。ドクターの言うことを聞く。それ以外に、自分が元気で、学校にも社会科見学にも行けるのだと、分かっただけじゃなく方法も。

次の日、早朝から看護師はけたたましいナースコールという名の苦情で、院内を走りまわる羽目になった。

「あ、あのね、幸子郎くん？ たしかに、元気になれば学校に行けるとは言ったけど」

看護師の言葉に、幸子郎は電子リコーダーを吹くのをやめて言った。

「僕は元気だよ。だから学校だって行けるし、社会科見学だって行ける。だってほら、こんなにリコーダーが吹けるし。病気だったら、こんなに上手にリコーダーは吹けないでしょ？」

自信たっぷりに言うと、病室のベッドの上でふたたびリコーダーを奏で出した。

ドクター・シュトライヒリングは、幸子郎の病室——2012号室に来るなり、幸子郎と看護師を交互に見やり、そしてため息をついた。

「……君が音楽が好きだということはよく知っているが」

ドクターは病室の窓をきっちり施錠し、すべての施錠を確認すると、幸子郎に向き直った。

「会話は言葉で行った方が、スムーズだよ」

幸子郎は、まっすぐにドクターを見つめながら、ひととき高らかにリコーダーを鳴らした。ドクターは^{うち}埒があかないかと思ったのか、病室の隅で縮こまっている金髪の看護師に尋ねる。

「これはどういうことだね？」

「社会科見学に行きたいと以前から言っていて……今日はいつになく、その、アピールが激しくて……」

「ふむ。しかし、なんでまた、リコーダーなんだね」

ドクターの言葉に、看護師は一層縮こまってしまった。

「その、……リコーダーが上手に吹けたら、許可が下りると、そう思ったようで……」

「なるほどねえ……仕方あるまい。ドクター・ベネットと小児科のドクター夜淵をここに呼んでくれたまえ」

病室に三人も医者が揃うと、さすがに幸子郎も居心地が悪い。しかも、三人とも難しい顔をして話し合っているとなれば、なおさらだ。

「ねえねえ、何のお話してるの？」

「静かに、ね？」

電子リコーダーを取り上げられ、手持ち無沙汰な幸子郎を看護師がなだめる——それが、五分おきくらいの間隔で、かれこれ一時間は続いたのだろうか。

ドクター・ベネットが、幸子郎に向き直った。

「幸子郎くん、社会科見学へ行きたい？」

「うん！」

女医の問いかけに、幸子郎は力いっぱい頷いた。微笑みながら、ドクター・ベネットは言った。

「毎日お薬も飲んでるし、きちんといい子にしている幸子郎くんなら大丈夫って、さっき私たちが話し合って決めたわ。社会科見学、行きましょうね」

「ほんと!? 嘘じゃないよね！」

興奮してがばっと起き上がる幸子郎の頭を撫でながら、ドクター・ベネットは続けた。

「ただし、社会科見学へ行くのは幸子郎くん一人ではだめ。看護師さんとドクターも一緒にね」

社会科見学当日。快晴に恵まれ、子どもたちは移動用の大型車両を前に興奮の色を隠せない。幸子郎もそのひとりだった。だが、周囲の反応は、幸子郎を受け入れていたとは言いがたかった。

「ねえねえ、みんなと自動車に乗ったらだめなの？」

そう言って幼い子どものように愚図りだす幸子郎を見て、周りの子どもたちがぐすくす笑う。

「なあに、あの人」

「大きいお兄ちゃんなのに、変なのー」

「だめなの～？」

「あはははは、似てる似てる」

中には、幸子郎の身振り手振りを大げさに真似てみせて、笑い合っている子どもまでいる始末だ。同じクラスの子どもであれば、幸子郎がどんな人となりなのか、ある程度分かっているからいいものの、他のクラスにはそれが分からない。校庭に集合して乗り込むのを待つ間、ずっと^{やゆ}擲するように、遠巻きに幸子郎を見てぐすくす笑う声が消えない。ついに看護師はいたたまれず、医師と教師に相談した。

結局、学校と病院双方の判断で、社会科見学の移動中だけでなく、見学過程でも幸子郎は別行動ということになってしまった。

「ねえねえ、どうしてみんなはあっちの大きなのに乗れるの？ どうして、僕はちっちゃい自動車なの？」

小型自動車の席にぼつんと座って、寂し^{さみ}そうに幸子郎はつぶ^{つぶ}呟いた。

「病気だから？ みんなみたいに、元気じゃないから？」

看護師は何も言わずに、幸子郎の頭をそっと撫でた。

● Eternal Sunshine of the Spotless Mind

「陽の光を浴びるって、日光浴って言うじゃん？ あと、日当たりとか言うしさ」

「そうね」

「じゃあさ、風を浴びたい、風を感じたいって言うときさあ、風当たりを感じるになっちゃうんだけど。なんで？」

御堂花楓^{みどうかえで}の問いかけに、ライサ・チュルコヴァは読んでいた本から顔を上げた。

「なんで、って何の話？」

「風の話」

花楓がそう答えると、ライサは大げさにため息をついた。

「何を言いたいのか、全然分からないわ」

社会科見学が終わり、今やクラスの話はすっかりキルシ先生へのお見舞いと、バレンタインデーのチョコレートに移っている。放課後の図書室で、花楓がライサを見つけて話しかけたのは、ちょうどそんな時期だった。

ライサはしばし考え込んだあと、花楓に言った。

「風を浴びるとか、風を感じたい、でいいんじゃないかしら」

「でもさ、じゃあなんで日光浴なんて言葉があるの？」

「知らないわよ、そんなこと」

花楓が何を言いたいのかよく分からないのか、ライサは少しいらだつたようだった。

「うーんとね、つまり、一緒に風当たりを感じに行かないか、ってことなわけ。そういうの必要じゃん」

「ちっとも話がつながってないわよ」

「あれ、そうかなあ。何も考えない時間って必要だからさ、もう一度風力発電のプロペラをぼーっと眺^{なが}めたいなーって思っ」

「いやだから何の話よ？」

「ライサがいつも何か考え事してるみたいだからさ。考えるのも大事だけど、たまには頭空っぽにしないと、パンクしちゃうよ」

花楓をまじまじと見つめて、ライサはため息をついた。

「なんだかよく分からないけど、あなたにはわたしがそうい

う風に見えてるんだってことは分かったわ」

「で、どう？ 休みの日に行こうかと思うんだけど」

「どうって言われても……自動車じゃないと結構歩くわよ、あそこまで」

「歩けばいいじゃん。ていうか、自転車だってあるじゃん」

こともなげに言う花楓に、三度目のため息をついたのち、ライサは答えた。

「別にいいけど……早めに帰らせてもらおうわよ。休みっていったって、わたしにはわたしなりにやることだってあるんだから」

● 忘れられた機械

瀬戸戸鈴夏がそれを見つけたのは、バレンタインデー特有の浮き足立った空気が学校中を包み出す、二月初旬のことだった。

学校——初等教育クラスの校舎だけでも、付帯施設なども含めれば、かなり広い。専用の太陽光発電システムと蓄電設備付近は、子どもは立入禁止になっている。もしかすると初等教育クラスを卒業するまで無縁の場所も、ひとつやふたつはあるだろう。

鈴夏が目をつけたのは、そういう場所だった。

冒険があるのは、学校の外だけではない。先生から入ってはいけないと言われた場所や、今まで行く用事もないから行ったことのない場所も、まだまだある。そんな場所をこっそり調べて、自分だけの秘密地図を作るのだ。

放課後、鈴夏はまずぐると学校の周辺を一周してみた。それだけでも、新鮮な発見はいくつもあった。

校舎の裏手にある通用門には、教職員専用の昇降口と駐輪場があること。

校舎裏には、かろうじて雑木林と呼べる程度だが、木々が生えていること。

給食室付近には、おそらく学校専用なのだろう、野菜のミニプラント——鈴夏はまだ知らないが、家庭科の一環として、校内のミニプラントで野菜を育てて調理する——があるということ。

「けっこう、地図も埋まってきたじゃん！」

毎日持ち歩くように口を酸っぱくして言われている市民証モバイルで、鈴夏は自分だけの秘密地図を作っていた。

授業などで使うタブレット端末の方が基本的なスペックが高く、アプリもいろいろ入れられる。一方で、宿題の提出や友だちとのデータのやり取りなど、他端末との接続が多い。机の上に放り出しておけば、そのまま誰かがデータを覗くこともできるのだ——その場合、覗いた側と、パスワードをかけていない、あるいは破られやすいパスワードを設定していたという理由で、覗かれた側もまとめて叱ら

れる。

その点、市民証モバイルはスペックこそ高くはないが、住所氏名や家族構成、血液型や既往歴を始めとする医療用情報さえも含む個人情報^{かたまり}の塊であり、不用意に他人が触れることはない。

「今日は校舎裏を重点的にやっちゃうもんね！」

鈴夏は意気込んで、校舎裏へと突き進む。教職員用の昇降口や駐輪場があるため、先生に見つからないようにそっと忍びこむのも、鈴夏の冒険心をくすぐった。

駐輪場には、先生たちの自転車が停まっていた。「これは一……ローマン先生。あ、これは夜淵先生^{よるぶち}かー。自転車も赤いんだな」

指差し確認をしながら、鈴夏は少しずつ地図に情報を加えていく。どんな些細な情報^{ささい}も見逃さない。冒険では、ほんの少しの油断や甘えが、取り返しのつかない事態を招くことだってあり得るのだ。

駐輪されていた自転車すべてをチェックし終わると、鈴夏の興味は近くの雑木林に移っていった。

そっと足を踏み入れると、ぱきりと、枯れ枝が折れる音がした。おそらく誰も手入れをしていないのだろう、木々の枝は自由奔放に伸びて日光を遮っている。

道に迷う方が逆に難しい程度の規模とはいえ、鈴夏は念のため慎重に先へ進んだ。すると、木々の間に小さな建物のようなものがあった。

「なんだあ、これ」

見れば、ずいぶんと汚れている。しかも相当古い。何かの機械のようだが、鈴夏の目には、古すぎてまともに動きそうには見えなかった。恐る恐る触れてみると、表面は温かい。

「うーん……動いてる、のかな？」

ぐるりを周りを歩いてみると、メーターのようなものが付いている。泥がこびりついてはいたが、それを指でこすり落とすと数値がうっすらと表示されている。

Storage rate

93%/100%

「んー。ということは、蓄電設備か何かなのかな？」

鈴夏はよく分からないなりに、とりあえず秘密地図に情報を書き加えるのだった。

●風を継ぐ者

「お、またあの子が来たぞ」

誰かが窓の外を指さして言った。

「風車少年くん、よく来るねえ」

「自転車があるにしたって、街からじゃわりと距離があるのにな」

「将来は風車屋か」

「ほとんど毎日来てますからねー。風車好きとして将来有望ッスね」

わいわいと業務の傍ら^{かたわ}、風力発電所の職員たちは窓の外の子どもを見守る。

山野ニコトポは——本人はまったく知らないが——風力発電所の有名人になりつつあった。毎日のように風力発電のプロペラ近くまでやってくれば、職員たちも存在に気づくというものだ。

今日もまた、ニコトポは友人のルン＝ペルとともに、プロペラの近くまでやってきていた。その姿を、近くの事務所から見守る大人たちがいることには、一切気づかないままで。

太陽光発電所と違い、風力発電所は敷地が広域にわたるため、「風の公園」から地続きの、半ば公園のようになっている。強風のときはさすがに閉鎖されるが、穏やかな天候であればプロペラ近くまで行って見上げることもできた。

(さあ、今日もサインを残していこう)

ルン＝ペルは今日も張り切っているようだ。

ニコトポはルン＝ペルに額^{うなず}と、背負っていたリュックサックから小石を取り出し、プロペラの足元に近づいていった。

「おいおい、危ないぞ」

不意に、頭の上から声をかけられ、ニコトポは弾かれたように上を見上げた。

見れば、プロペラのメンテナンスをしていたのだろうか、男性がするすると器用にロープを使って降りてくる所^{ところ}だった。

(ほら見るよ! ああやってプロペラに登るんだ!)

ルン＝ペルが興奮して叫ぶ。ニコトポも、ごくりと唾^{つば}を飲み込むと、男性が地面に降りてくるのを待ち構えた。

男性は地面に足をつけると、命綱と合わせてかぶっていたヘルメットを脱いだ。ハニーブロンドの髪が、夕映えにきらきらと輝いた。

「おっ、きみは風車少年じゃないか。はじめまして」

「……こんにちは」

話しかけられると急に恥ずかしくなって、ニコトポはルン＝ペルの後ろに隠れようとしたが、ルン＝ペルはそれを許さない。

(だめだめ、せっかくのチャンスじゃないか!)

ニコトポは意を決して、男性に話しかけた。

「あ、あの、ぼく、ニコトポ、山野ニコトポといいます」

「ニコトポくんか、こんにちは」

「あと、こっちは友だちのルン＝ペル」

「ん？」

「ぼくたち、プロペラに登りたいんです」

真剣な目で見上げるニコトポを、男性はまじまじと見つめ返す。

「ぼくたち、ねえ……。ううん、しかし、登りたいと言われてもなあ……」

「ぼくたち、この街で一番高いところに行きたいんです」

頬を真っ赤に染めて、ニコトポが言う。

男性はしばらく考えこんだあと、言った。

「……おじさんに考えがある。さすがに発電用はだめだけど、実験観測用ならあるいは、許可が下りるかもしれない。また今度来てくれるかい？ ただプロペラじゃなくて、ちゃんと受付ロビーにね」

● Jill Price, 42

ふたつの丘の風車は、今日も回り続けている。

潮騒の音とともに、プロペラが回る音は、絶え間なく続く。

花楓とライサは、ふたたび風力発電所を訪れていた。受付ロビーで申請さえすれば、見学用に設置されたコースを自由に見てまわることはできる——市民証モバイルの保護者データ提示が必要だったが。

受付ロビーで申請を済ませた後、ずいぶん機嫌が悪かったライサだが、見学用コースを歩いているうちに、気分も切り替わったらしい。

「すごいわねー」

回る風車のプロペラを見ながら、ライサが感心したように言う。

「あれ、あんまり乗り気じゃなかったじゃん」

「そうだったかしら」

「そうだよ。『別にいいけど……早めに帰らせてもらうわよ。休みっていったって、わたしにはわたしなりにやることだってあるんだから』なんてさ。なんかもうソッコー帰る気だったじゃん」

「やめてよ、そんなしゃべり方しないわよ、わたし」

「したってば。本片手にさ、図書室で。時間はちょうど午

後四時だった。覚えてるよ、わたし」

「嫌味ねえ」

ライサは眉をしかめる。だが、そんな態度をされることには、花楓はもう慣れている。

「ずーっと覚えてるからね、わたし」

「何よそれ」

「本当だってば。病院で診てもらったこともあるよ。わたしの頭は、忘れることができないんだって」

「嘘でしょ、そんなの」

「本当だってばー。だからさ、頭がパンクしないように、ときどき頭の中を空っぽにしたいんだ。こうやって、プロペラぼんやり見たりしてさー」

ライサは花楓の横顔を伺う。

やがて言いにくそうに呟いた。

「でも、忘れることはできないんでしょう？」

「……うん」

花楓は頷いた。

頭の中を空っぽにしたい——それは、花楓にとって不可能な行為だ。

どんなに忘れようとしても、忘れることはできない。思い出という名の、きれいで都合のいい改変がされることもなく、いつまでも鮮明に、花楓の脳の中で再生されるのだ。それはあまりに鮮明すぎて、花楓には、ときどきそれが今まさに起こっていることなのか、過去に経験したことなのか、区別がつかない。

今もプロペラを見ると、社会科見学の時のことを思い出す。あの時並んでいた列の順番も、職員の話も、その時感じていたことも、潮の香りも、風の勢いも、何もかもすべて、省略も改変もされることなく、そこにあり続けるのだ。「ねえ、花楓？」

「なに？」

「……ここに来て、空っぽにしたつもりなだけでしょう？」

それって苦しくないの？」

花楓は答えない。答えようがなかった。

●赤い靴の少女

線路はどこまでも続いているように見えた。これに沿って歩いて行ったら、いったいどこまで行けるだろう。

西藤はるせは、そんなことをぼんやり考えながら歩いていた。

二月一四日、学校中がチョコレートに夢中になっていた。昨日は、クラス的女子が何人か集まって、家庭科室でチョコレートを作っていたらしい。はるせはまだ家庭科室に入ることがないから、少しうらやましかったけれど、お菓子づくりにあまり興味がわかかなかったので参加はしなかった。

今日も公園へ寄ろうと思っていたが、どうやらいつものようにリコーダーを吹ける雰囲気ではなかった。だから、はるせは線路沿いをひたすら歩く。どこかに行くあてがあるわけでもない。リコーダーを吹きながら、はるせは歩き続ける。ときどき、大きく風を揺らして、電車の車両が通りすぎていく。はるせの背ではよく見えないが、どうやら乗っているのは大人ばかりのようだ。子どもはめったなことでは電車に乗れない。乗る理由がそもそもない。

けれど電車が横を走り抜けていくたび、髪が勢い良く揺れるのが、はるせにはなんだか嬉しくて、リコーダーはさらに歌うのだ。

赤いスニーカーは、はるせの足にはまだ少し大きくて、歩くたびにかばかばと踵^{かかと}が抜けそうになる。なんだかリコーダーのメロディに合わせているようで、はるせにはそれがまた嬉しい。

——きっと、おねえちゃんがいっしょに歌ってくれてるんだ。

はるせのそばには、今でもおねえちゃんがいるのだ。はるせの目には見えなくなっただけで。

見たこともないものを見に行こう。おねえちゃんと一緒なら、きっと行けるはずだ。

「おーい」

後ろから、誰かが呼んでいる。

「おーい、そこのきみー。赤い靴の子ー」

そうそう、赤い靴といえば、わたしのスニーカーも赤いんだよ。おねえちゃんのスニーカーなんだ。

そんなことをはるせが思っていると、肩にぽんと手が置かれた。

「どこへ行くんだい？ もう夕方だよ」

振り向くと、そこに帽子をかぶった青年がいた。はるせはぼんやりと青年を見上げる——知らない人だなあ。

青年は、はるせの目線に合わせてるように腰をかがめた。どうやら、はるせの返答を待っているようだ。

「うーんとね」

はるせは考えつつ言った。

「どこまで行けるかな？」

「いやあ、どこまでって……まあ線路沿いに歩いていけば、そりゃあ最終的には閉じた扉までだって行けるけどさ。さすがに遠いよ。歩くのは無理だ」

はるせの問いに答えてから、青年は頭を振った。

「いやいや、そうじゃなくて。えーと、つまりだ。だめだよ、一人でこんなとこ歩いてたら。迷子になったらどうするんだい」

「迷子になるの、わたし上手だよ」

「へえ、そりゃすごい、才能だな。……って、いやいやいや、そうじゃない、そうじゃない。そうじゃなくて」

「そうじゃないの？」

「そう、そうじゃない。って、なんだこの会話」

「うーん？」

「だろうなあ。お兄さんにも分かんないや」

青年は苦笑するが、はるせにはさっぱり分からない。もうちょっと分かるように話してほしいなあと思いつつ、線路を指差して、はるせは問う。

「ねえねえ、ここから先、ずっと行ったらどこまで行けるの？」

「これ以上行っても、何にもないよ。次の街までずーっと線路が続くだけだ。家はどこだい？ もうすぐ夜だ。お母さんが心配してるよ」

はるせは足元を見る。おねえちゃんの赤いスニーカー。

「おねえちゃんは、赤い靴をはいていたから、遠くへ行っちゃったのかな？」

「へ？」

「なんでもない」

青年は心底参ったなあという顔をしながら、はるせに言った。「ほら、一緒に駅まで戻ろう。電車から女の子が一人で歩いてるって連絡があつてね。もしものことがあったらいけないってんで、駅からここまで迎えに来たんだからさ。素直に一緒に帰ってくると、すごく助かるんだ。僕が一人で戻ってごらんよ、先輩たちに怒られちゃう。お前行ってこいって言われてさ。ここまで来たんだから。だいたいさ、こんな時間に一人でとぼとぼ歩いているなんて、映画や小説だったら、今ごろ犯人に誘拐されてるぜ」

ハンニンとかユーカーイって何だろうな、と思いつつも、そこまで言うなら仕方ないかなあ、とはるせは青年のために戻ってあげることにした。

青年は駅の職員だという。去年就職したばかりで、まだまだ雑用程度の仕事しかできないけれど、いつかは電車を運転するんだと、聞かれもしない話を延々していた。

「電車、好きなの？」

「ああ」

青年は線路を眺めながら、夢見るような目で頷いた。

●それはあまりに日常的な

二月下旬のある日。午後四時を少し過ぎたころ、停電が発生した。

しかし、皆慣れたもので、驚きもせずに非常用電源に切り替えたり、バッテリーが残っているうちにデータのバックアップを取り始める。

役所や病院の設備は、主要発電所からの送電が途絶えると、自動で自家発電装置に切り替わるようになっている。そもそも発電設備を常備しているところも多い。

まだ日が落ち切っていなかったことも幸いして、トラブル

らしいトラブルは発生しなかった。

その日の夜七時ごろには復旧し、ふたつの丘は何事もなかったように元通りの生活を再開した。

●電気はどこへ消えた？

放課後、鈴夏はまた、雑木林の中の古めかしい機械のところへやってきた。裏手に回っただけなのに、なんだかずいぶんと遠くまで来てしまったような感覚を覚える。普段来ることもない場所だから、そんな風を感じるのだろうか。そう思いながら、鈴夏はふと違和感を覚えた。

「なーんか変だなあ」

その正体を探るように、鈴夏はあたりを見回す。

「……あっ」

一瞬感じた違和感の正体に気づいたとき、鈴夏は思わず声を上げていた。

「……なくなってるじゃん」

Storage rate

1%/100%

「おととい一昨日見たときは、メーターは93%を示していたはずだ。

漏電でもしているのだろうか、と鈴夏は一瞬考えたが、すぐに思い直す。万が一、この古臭い機械が漏電しているのなら、先生たちだっていくらなんでも気づくだろう。今ごろこのあたりは立入禁止にでもなっているはずだ。ところが、そんな気配はない。先生たちからは、何も言われていない。

「ここにあった電気は、どこへいったわけ？」

鈴夏の疑問に、答えるものはいなかった。

●検査結果

「結論から言おう。FADではない可能性が非常に高い。念のため、データが残っている範囲ではあるが、第一世代まで調査した、だが、一番、一四番、一九番、二一番……いずれにも変異は認められない」

「やはりあの子も……」

「おそらく、今までで最年少の発症例だろう」

「ルアナ症例ケースでさえ、最初の発症は19歳だったのに」

その部屋では、もはやため息をつくのさえ憚はばかられた。

登場 PC・NPC一覧

【PC】

- ・瀬木戸鈴夏
- ・西藤はるせ
- ・御堂花楓
- ・山野ニコトボ
- ・穂刈幸子郎

【NPC】

- ・ライサ・チュルコヴァ
- ・ドクター・シュトライヒリング
- ・ドクター・ベネット
- ・金髪の看護師さん
- ・風力発電所職員の皆さん
- ・ハニーブロンドの風力発電所職員
- ・新米の駅職員

【名前だけ出てきました系 NPC】

- ・ドクター夜淵（小児科）
- ・キルシ・サロコスキ
- ・ローマン・ジェフリーズ
- ・夜淵四季

【単語（※人名じゃないよ）】

- ・ルアナ症例ケース